



その12

空海

—くうかい—

(平成24年2月1日号—第277号)



空海（弘法大師）は、平安時代初期の僧で、真言宗の開祖として知られ、全国各地に足跡や伝説が数多く伝わります。また、書にも優れ、橘逸勢 [たちばなのはやなり] と嵯峨天皇とともに三筆 [さんびつ] の一人としても有名です。

宝亀5年（774）生まれの空海は、讃岐国多度郡 [たどのこおり] 弘田郷（香川県善通寺市）の豪族である佐伯家出身で、幼名を眞魚 [まお] といいました。18歳の時に都の大学寮に入り、儒学を学びましたが、その後、密教に触れて仏道を求め、大学を出て奈良・吉野の金峯山 [きんぷせん] や四国の石鎚山などで山林修行に励んだといひます。

延暦23年（804）には遣唐使の留学僧として唐へ渡り、わずか2年という短期間で密教を修めました。帰国後、弘仁 [こうにん] 7年（816）に、鎮護国家の祈念や修行者のための道場として、勅許を得て高野山金剛峯寺を開創し、弘仁14年（823）には、嵯峨天皇から東寺（教王護国寺、京都市南区）を賜り、ここを真言密教の根本道場としました。

この東寺と高野山を結んだのが東高野街道で、枚方市域では、洞ヶ峠から高野道・出屋敷・池之宮の四辻を経て茄子作を通過します。このような歴史的背景も影響して、市域には空海にまつわる伝承が数多く残ります。

例えば出屋敷には、空海が千度詣 [せんどもうで] の際に休憩したと伝わる円通寺があります。また、楠葉や田口（出屋敷）では、空海が錫杖で井戸を掘り当てたという話が残るとともに、山之上でも、空海が野宿をした林が、「蚊入らずの林」と呼ばれるようになったという伝承があります。

空海は、承和2年（835）に高野山で示寂 [じじゃく] し、のちに醍醐天皇から弘法大師の諡号 [しごう] が贈られました。



東高野街道（写真は出屋敷付近）